

ナスミバエの被害軽減対策とまん延防止について

2010年12月、沖縄本島においてナス科作物の重要害虫であるナスミバエの発生が確認されました。7月現在、本島中南部地域において本種の発生が確認されており、今後発生地域の拡大が懸念されます。

本種による被害軽減およびまん延防止のために、以下の対策を徹底しましょう。

1 ナスミバエの生態

- (1) ナスミバエ(*Bactrocera latifrons*)はハエ目ミバエ科に属しており、東南アジア、ハワイ、タンザニア、ケニアに生息しており、我が国では沖縄本島のみが生息している。
- (2) 成虫は体長約7mmで不妊虫が放飼されているウリミバエに似るが、中胸背板中央の黄色線が欠如していることや(図1a)、翅の斑紋が異なること(図1b)から区別できる。
- (3) 幼虫は体長7~9mmで乳白色・黄白色である(図2)。
- (4) 年間世代数はおよそ7世代である。雌成虫は果実に産卵管を刺して産卵する(図3)。幼虫は果実内部を食害し、老熟幼虫は果実から脱出後、地中で蛹化する(図4)。
- (5) 寄主植物はナス、トマト、ピーマン、トウガラシ、テリミノイヌホオズキなどのナス科植物および一部のウリ科植物である。

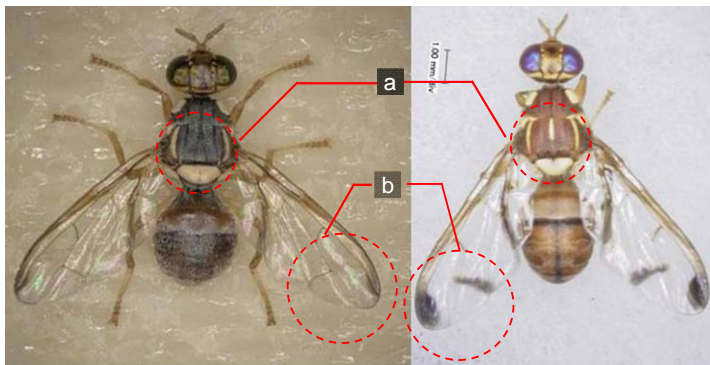


図1 ナスミバエ (左) とウリミバエ (右)



図2 ナスミバエ幼虫



図3 シマトウガラシに産卵するナスミバエ雌成虫



図4 ナスミバエ蛹

2 果実への被害

ナス科植物(ナス、ピーマン、シマトウガラシ、トマト、テリミノイヌホオズキ等)を主に加害する(平成22年3月、4月病害虫防除技術センター発行「ミバエ類寄主植物調査ハンドブック」68~86ページ参照)。幼虫に寄生された果実は食害により腐敗する(図5)。シマトウガラシやテリミノイヌホオズキでは果実が水浸状となる(図6)。



図5 ナス果実の内部腐敗

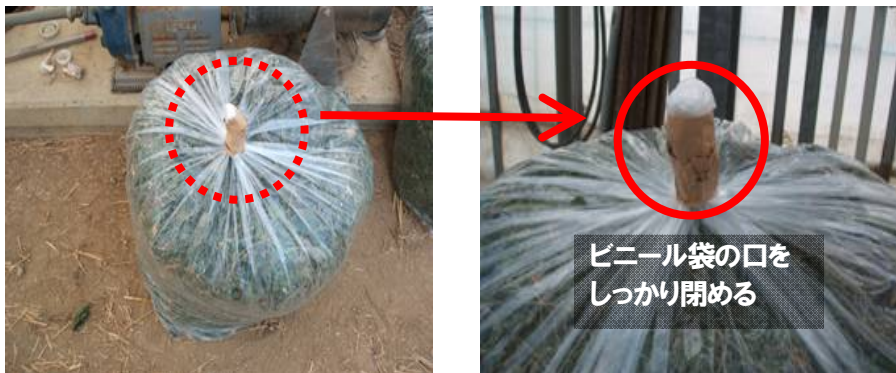


図6 シマトウガラシ(左)とテリミノイヌホオズキ(右)の被害

3 被害軽減対策

本種は農薬による防除が困難であるため、袋がけや網かけなどによる予防および被害軽減に努める。

- (1) ナス科野菜栽培施設の出入口は二重カーテンを設置し、こまめに閉じておく。ビニール、ネット等の破損部分は直ちに修理する。
- (2) 防虫ネットは目合い 1.6mm 以下を使用する。
- (3) 露地栽培では防虫ネットで被覆するか、果実に袋がけをする。
- (4) 落下果実や果実残渣はビニール袋に1か月ほど密封処理(図7)するか、焼却する。
- (5) 栽培終了後の株は放置せずに抜き取り、速やかに処分する。
- (6) 施設周辺および圃場内外の野生寄主植物(テリミノイヌホオズキ等)は除去する。



(果実残渣等をビニール袋に入れて約1か月程度密封処理後、廃棄)

図7 残渣物のビニール袋による密封処理法

4 まん延防止対策

- (1) 発生地域(沖縄本島)から未発生地域へ収穫物を持ち込む場合は、被害果実が無いか確認する。
- (2) ナスミバエによる被害果実は外見からでは判断が困難な場合があるので、疑わしい果実を発見したら放置せず、ビニール袋などに密封し、速やかに最寄りの県関係機関に届ける。